



Title	アジア太平洋論叢 第23号 編集後記
Author(s)	
Citation	アジア太平洋論叢. 2021, 23, p. 123-124
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/95072">https://hdl.handle.net/11094/95072</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 編集後記

今年 1 月に、鹿児島大学の友人・細川道久氏との共著『駒形丸事件——インド太平洋世界とイギリス帝国』（ちくま新書 1543）を出版した。その原型は、35 年前に旧大阪外大に職を得た時にお会いして以来、ご教示をいただいている、桑島昭先生の「シンガポールにおけるインド軍歩兵連隊の「反乱」」のご研究である。旧外大のアジア地域研究、外国学研究の利点を最大限活かして執筆できたと、心より感謝しています。

阪大文学研究科では、地域研究の成果を取り込んだ、「アジアから見たグローバルヒストリーの構築」を目指しています。今号にも、関連の諸研究を掲載できた。引き続き、広範な共同研究を展開していきたいと思います（秋田 茂）。

阪大箕面は今年から来年にかけて大きな変革の時を迎えます。まず、2021 年 3 月に 40 年間拠点を置いた粟生間谷のキャンパスから、千里中央の北側にある新しい箕面船場キャンパスに移転します。そして 2022 年 4 月、大学院が豊中の文学研究科・言語文化研究科言語文化専攻と統合して、新しい人文学研究科の「外国学専攻」に生まれ変わります。箕面の学部には 100 年の伝統があり、これを牽引するあたらしい研究大学院を構築するいとなみがはじまります。箕面の伝統である言語文学研究と地域研究の融合が「外国学」という理念です。箕面の地にあるもろもろの学統が日々交渉しながらこの理念の内実が徐々に形作られるはずで、いまのところオープンエンドにゆるやかに考えればよいのではないのでしょうか。なによりも、この大学院に進学する学生たちが活発に議論を共有できる場に育てていきたいと思っています。（池田一人）

2020 年度はコロナ禍の中で、多くの学会や研究会はオンラインによる開催となったのではないかと思います。大阪大学地域研究フォーラム（OUFAS）もオンラインとなったが、池田一人先生、菅原由美先生らのご尽力により、例年と変わることなく多くの若い研究者による報告が行われた。その要旨は本誌に掲載されている通りである。そして、若手研究者から多くの投稿がなされ、数編の論文が掲載されたことは、大変喜ばしいことである。次号にも多くの若手研究者による積極的な投稿を期待したい。

本誌は前号から電子ジャーナル化したが、内容的に一層充実してきたように思う。編集長としての宮原暁先生のご尽力に改めて感謝したい。（高山正樹）

Symbiosis という生物学の用語は、人文学では今のところ比喩に過ぎない。「異質」なものを取り込んで、生物が新たな進化の段階に到達するというのは、ミトコンドリアやレトロ・ウイルスと、宿主細胞との間に生ずることは知られているが（現在の新型コロナ・ウイルスもどこかでヒトの進化をひきおこしているのだろう）、人と人との社会的な関係を理解するのにそのまま応用することはできない。社会が「異質」なものや「他者」をとり込むのだということが、レイシズムや同化論にいと簡単にすり替えられることは、「多文化共生」の美辞を借りた他者の飼育慣らしを見れば明らかであろう。比喩以前の Symbiosis には、「適者生存」という語に象徴されるような「進化」を「前進」とみなす価値判断は含まれていない。それと同じ水準で Symbiosis を社会的に定義するとすれば、どのような局面に社会的な Symbiosis を発見することができるだろうか。フランク・ライアンは、Violution (Virus と Evolution を合わせた造語) という本の中で、「従来、他者と考えられていたウィルスが、多くの病気の原因となると同時に、日々の暮らしに欠かせないのだとしたら、何が正常なのかの境目が曖昧になってしまう」と書いた。そうしたことが比喩としてではなく、社会的な事象のなかにも見つかるのであれば、それはどこにか。これも今のところ比喩に過ぎないが、「自己」と「非自己」の境界というのは、絶対的なものではない。少なくとも生物学ではそうらしい。もしそうした次元で文章が書かれるとしたら、それはまるで不協和音のように意味が混雑したものとなるのかも知れない。本誌は、とりあえずそうした多声的な、あるいはシンビオティックな文章が許容される空間であろうとしている。多くの投稿と寄稿をお待ちしている。(宮原暁)

\*\*\*\*\*

本号は、大阪大学大学院文学研究科秋田茂先生の研究費によって刊行が可能となりました。改めて御礼申し上げます。

お忙しいなか、本号の論説、研究ノート of 査読の労をお取りいただいた 6 名の査読者の方に、末筆ながら御礼申し上げます。ありがとうございました。